

富士原伸弘 提出 学位申請論文（課程博士）

『古事記における婚姻伝承の研究』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、『古事記』に見える婚姻伝承の意義を明らかにするものである。「序論」に続いて、第一章「婚姻伝承の型と構想」（第一節「はじめに」第二節「幸行型の特性」第三節「髪長比売婚姻伝承」第四節「おわりに」）、第二章「婚姻伝承の諸相」（第一節「はじめに」第二節「大魚婚姻伝承」第三節「矢河枝比売婚姻伝承」第四節「おわりに」）、第三章「石之日売命伝承」（第一節「はじめに」第二節「石之比売命像」第三節「石之比売と忍坂之大中津比売命」第四節「石之比売命の出自」第五節「おわりに」）、および「結論」により論じられ

ている。「序論」では古事記の婚姻伝承研究の意義を説く。古事記は神話や天皇の物語を中心とする男性社会の物語でありながらも、そこに様々な女性の物語が展開する。これは古事記という書物が女性に特別に注目したからであり、そこには古事記の持つ一つの構想が見られる。古事記の婚姻伝承は上・中・下巻を通して見られ、それらは異彩を放つものであり、その物語にどのような理由が存在するのかを吟味することで、古事記の構想が浮かび上がることが期待できる。そのための方法と目的としては、古事記の婚姻伝承の体系化であり、具体的には古事記の中の婚姻伝承から話型による分類を行い、各話型の伝承がどのような働きを持つのか、そこに導かれる伝承の特質は何かを明らかにすることにあるとする。

第一章「婚姻伝承の型と構想」では、古事記に見える全二十七例の婚姻伝承を四つの型に分類し、そこに見られる特徴を検証して婚姻伝承およびそれを必要とした古事記の構想を導くことを目的とする。そのためにまず婚姻伝承を四

つに分類して、第二節では（一）幸行型（求婚者である男性が、どこかに幸行して女性に求婚するという展開を持つもの）、（二）喚上型（男性が女性を喚上げるといふ展開を持つもの）、（三）神婚型（男性・女性のどちらか一方が神、または異類であり、婚姻において「変化」するというような展開を持つもの）、（四）その他（どの分類にも当てはまり得ないもの）に分け、その中で主に幸行型について論じる。幸行型は更に邂逅型（男性が女性と偶然出会うもの）と婚い型（特定の女性を求婚する為に幸行をするもの）という二型に区別ができ、共に成就する婚姻を述べる傾向があることを明らかにする。さらに邂逅型と婚い型との違いを、「男性の名告り・婚姻の承諾・酒宴の設定」の記述方法に着目して検証した結果として、邂逅型には女性の父の姿と服属の姿勢を見て取れることを明らかにするとともに、一方では婚い型には、女性自身の意志が描かれていたことが認められることに注目する。そこで邂逅型は王権とのつながり（系譜と相互補完の関係）を積極的に作る意識があり、逆に婚い型では王権と

の繋がりよりも婚姻伝承そのものに視点があると考え、そこから婚い型の中に婚姻に対する女性の意志を表現しようとする、何らかの意図が働いていると想定する。第三節は喚上型となる髪長比売婚姻伝承を扱う。第二節により分類し導いた特徴を見ると、古事記では喚上型は「成就しない婚姻」となる傾向を示すことを明らかにする。髪長比売と仁徳天皇との物語は、例外的に婚姻が成就しているのであるが、男女いずれかの死や反乱に展開する「喚上型」により導かれるものではなく、難波津における出会いから始まる恋物語、すなわち「邂逅型」の影響下にあるためではないかと想定する。古事記の態度は、大雀命を中心とする二男一女の恋物語として描いていることが知られるのであり、そこには日本書紀に見られる偉大な父天皇から女性を授かった子の喜びは見られない。恋の勝利者としての仁徳天皇が存在すると同時に、恋物語の中心には髪長比売の美しさが強調されていることが認められ、古事記において髪長比売は他にましてドラマチックに描かれているのだと指摘する。

第二章「婚姻伝承の諸相」では、大魚と矢河枝比売の婚姻伝承を取り上げる。第二節の大魚婚姻伝承では、まず「歌垣の場」をどのように捉えるべきかを考察する。古事記において歌垣の場は「闘争の場」ではなく、「男女の恋愛の場」としてのみ機能していると考え、そのような歌垣の場において、古事記は袁祁命を恋の勝利者として描いていることを論じる。また大魚に対する「美人」の表記が、神霊的女性に使用されるものであることを指摘し、袁祁命が神霊的女性の助力を得る構想になっていると述べる。第三節の矢河枝比売婚姻伝承は、聖婚から聖なる御子の誕生により皇位継承者の資格を得るという通説に対して、改めて物語の展開の再検討を行う。それにより宇遲能和紀郎子が「聖なる御子」であっても、皇位継承者としては扱われない問題を指摘する。矢河枝比売婚姻伝承の「一時」という特殊な冒頭の表現に注目することで、応神記の構想の中のこの婚姻伝承がどのような働きをしているのかを問題とする。その結論としては、古事記では宇遲能和紀郎子を皇位の継承者としては認めていない

こと、「一時」という曖昧な時間を設定して宇遲能和紀郎子の持つ「聖なる御子」としての面を強調したのだと考える。そして聖婚を経て誕生した聖なる御子からの皇位の譲渡という名目を、聖帝としての仁徳即位に付与しようとするものであったと論じる。この大魚と矢河枝比売の物語を通して、両者の神靈的性格の女性を得ることで、皇位継承や即位の正統性を明確にすることが古事記の構想として存在したのではないかという見通しを立てる。

第三章「石之日売命伝承」では、古事記婚姻伝承の中核ともいえる石之日売命伝承を取り上げる。第二節では古事記・日本書紀の比較を通して石之比売命像を八田若郎女との関係から考察し、ここから石之比売命の人間的女性としての嫉妬する妻の姿を導き出す。古事記や日本書紀における石之比売命像とその伝承を分析すると、日本書紀では八田若郎女立後の条件となるための絶対的拒否者、死に行く運命の皇后として描かれており、それは次の皇后である八田若郎女の正統性を保証する存在としてのみ描かれていることを指摘する。それゆ

えに嫉妬する女性の姿は一女性としての感情を剥奪された無機的なものへと変質し、石之比売命伝承は日本書紀の構想する正史としての皇后伝承の一過程としてここに組み込まれたのだと指摘する。これに対する古事記では石之比売命は、より人間的に描かれていることが認められ、それは都合のよい皇后としてではなく激しく嫉妬する皇后として、かつ夫に対して深い愛情を持つ一女性として描かれていることを確認し、石之比売命を主人公として仁徳天皇をめぐる女性たちの愛の姿を強調して描いた恋愛物語であるという結論を導き、両者の関係を理想的夫婦の愛の形として描いたのだと論じる。第三節では古事記の太后である石之比売命の「礼無し」と「嫉妬」のモチーフが、日本書紀において忍坂之大中津比売命に転化されていること、また古事記において忍坂之大中津比売命が太后でありながらそれに相応しい伝承が記載されないのは、古事記が石之比売命伝承を重要視したことによるものであると指摘する。第四節では皇族以外の氏族出身の皇妃の初例とされる石之比売命が、古事記や日本書紀の

記載を検証すると必ずしもそのように扱われていないこと、古事記において建内宿祢の系譜を明記することにより石之比売命の位置づけは、孝元天皇の後裔（五世の孫）であり、決して他の皇后たちに劣るものではないことを論証する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、古事記が男性社会を中心としながらも女性に関わる物語が際だっていることから、そこに古事記の何らかの構想が窺われるのではないかという問題提起から出発する。確かに古事記の物語には後宮的性格が認められるという指摘があり、そこに連なる婚姻伝承の研究は重要な意義を持つに違いない。そのための方法・目的として伝承の体系化や話型分類を行い、そこに導かれる伝承の特質や個々の婚姻伝承の特質を明らかにするというのは、基本的態度として重要な視点である。

第一章「婚姻伝承の型と構想」では、古事記全二十七例の婚姻伝承を四つの型に分類し、(一) 幸行型、(二) 喚上型、(三) 神婚型、(四) その他、とする。その中の幸行型は、更に邂逅型と婚い型の二型に区別し、これらはいずれも成就する婚姻を述べる傾向があること、邂逅型には女性の父の姿と服属の姿勢とが見て取れ、婚い型には女性自身の意志が描かれていることが認められることに注目する。このことから邂逅型は王権とのつながりを積極的に作る意識が窺われること、婚い型では婚姻伝承そのものに視点があること、そこから婚い型の中に婚姻に対する女性の意志を表現しようとする、何らかの意図が働いていると想定する。また喚上型を取る髪長比売婚姻伝承の場合は、成就しない婚姻となる傾向を示すとする。髪長比売と仁徳天皇との物語は、例外的に婚姻が成就しているが、これは出会いから始まる恋物語、すなわち邂逅型の影響下にあるためではないかと想定する。また古事記は大雀命を中心とした二男一女型の恋物語を描いていることが知られ、そこには日本書紀に見られる偉大な父天皇

から女性を授かった子の喜びは見られないこと、恋の勝利者としての仁徳天皇が存在すると同時に、恋物語の中心には髪長比売の美しさが強調されていることが認められ、古事記において髪長比売の物語は極めてドラマチックに描かれているのだと指摘する。古事記には天皇の求婚物語が多く見られ、それを四つの型に分類することは十分説得性がある。また、その契機が幸行型を取ることが多いのも事実であり、そこでの求婚の展開が古事記の構想としてあることも事実である。その上で求められるのは、天皇の幸行と求婚との関係である。天皇の幸行が求婚を目的とするものでない場合、その時の求婚の意味を明らかにする必要があるのであるように思われる。

第二章「婚姻伝承の諸相」の大魚婚姻伝承では、歌垣の場をどのように捉えるのが問題となる。古事記の歌垣の場は闘争の場ではなく、男女の恋愛の場として機能し、袁祁命を恋の勝利者として描いていることを論じる。また大魚に対する「美人」という表記が、神霊的女性に使用されるものであることを指

摘し、袁祁命が神靈的女性の助力を得る構想になっていると述べる。古代文献の上で美人は神と接触する女性を指すことが多いから、大魚を神靈的であるとするのは、視点としては首肯できよう。歌垣の場が恋愛の場だというのもその性格から認められる。ただ古事記の構想という問題から考える時に、もう少し異なった意見も提出可能ではないか。歌垣の場にしても神靈的であるにしても原理的な問題であり、それが古事記の構想といかに関与するのかが求められるからである。また、矢河枝比売婚姻伝承では、宇遲能和紀郎子が聖なる生まれの御子でありながらも皇位継承者としては扱われない問題については、「一時」という曖昧な時間を設定して宇遲能和紀郎子の持つ聖なる御子としての面を強調しつつ、聖婚を経て誕生した聖なる御子からの皇位の譲渡という名目を、聖帝としての仁徳即位に付与しようとするものであったと論じる。ここに古事記の皇位継承に対する構想が認められることは確かであり、首肯されるものと思われる。ただ、この求婚物語に対してなぜ回りくどい物語展開が必要であるの

か、そのことを問題とする必要も求められる。

第三章「石之日売命伝承」では、石之比売命像を八田若郎女との関係から嫉妬する妻の姿を導き出す。日本書紀では皇后は絶対的拒否者、さらに死に行く運命として描かれており、それは次の皇后である八田若郎女の正統性を保証するための存在としてのみ描かれていることを指摘する。これに対する古事記の石之比売命は、激しく嫉妬する皇后、夫に対して深い愛情を持つ女性として描かれていることを確認し、石之比売命を主人公として仁徳天皇をめぐる女性たちの愛の姿を強調して描いた恋愛物語であるという結論を導き、両者の関係を理想的夫婦の愛の形として描いたのだと論じる。この場合もそれがなぜ理想の形で終始しなかったのか、という問題を明らかにすることが求められると思われる。また皇族以外の氏族出身の皇妃の初例とされる石之比売命であるが、古事記が建内宿祢の系譜を明記することで孝元天皇の後裔であることを語り、他の皇后たちに劣るものではないことを論証する。これらの論は石之比売命を中

心として展開する物語が、古事記においてどのような意義を有したかを論ずるものであり、文献解読の処理も妥当であり説得力がある。

もちろん、古事記にはまだほかにも求婚伝承が見られるが、皇位継承に関与する物語の論としては新たな発見が見られ、文脈の読みも十分である。以上によつて本論文の提出者富士原伸弘氏は、博士（文学）の学位を授与せられる資格があるものと認められる。

平成二十二年二月十八日

主査 國學院大學教授 辰巳 正明 ①

副査 國學院大學大学院客員教授 近藤 信義 ①

副査 國學院大學兼任講師 谷口 雅博 ①